

長寿企業における「長寿性」の研究

— 菩薩行を中心として —

小 倉 幸 雄

- I. はじめに
- II. 日本の長寿企業
 - 1. 日本の長寿企業
 - 2. 長寿企業の特徴
 - (1) 長寿企業の経営的特質
 - (2) 仏教からの影響
- III. 仏教
 - 1. 仏教とは
 - 2. 仏教の歴史
- IV. 仏教の根本教義
 - 1. 四諦
 - (1) 四諦
 - (2) 苦諦
 - (3) 集諦と滅諦
 - (4) 道諦
 - 2. 仏教と科学
 - (1) 科学的思考方法と仏教的思考方法
 - (2) 自他一如
 - (3) 智慧の宗教・実践の宗教
- IV. 仏教と経営
 - 1. 菩薩行
 - (1) おもてなしとサービス
 - (2) 菩薩行
 - 2. 仏教の職業観
 - 3. 仏教と道徳
 - 4. 仏教と長寿性
- V. 結びにかえて

I. はじめに

祇園精舎の鐘の声，諸行無常の響きあり。

娑羅双樹の花の色，盛者必衰の理をあらはす。

おごれる人も久しからず，唯春の夜の夢のごとし。

たけき者も遂にはほろびぬ，偏に風の前の塵に同じ。

『平家物語』より

すべてのものは変化し，栄華を誇ったものでもいづれ滅びの時を迎える。

企業も然り。毎年多くの企業が生まれ、多くの企業が消滅していく。企業の創業と廃業は、産業社会における新陳代謝にほかならない。

その様な理の中でも、堅実に経営し、長く維持発展を続けている企業もある。

帝国データバンクの「長寿企業の実態調査」によれば、2011年8月にまとめた調査では、明治末年（1912年）までに創業した「長寿企業」は全国で約25,000社に及び、200年以上の企業は3,000社超、500年以上でも30社超、創業1,000年以上の企業も7社もあり、日本は長寿企業が多い国といえよう。

では、長期存続に至る要因はどこにあるのか。

先行研究においては、その要因として、創業者、家訓、屋号、伝統的商品や技術、戦略等、現在まで伝承された特徴的な要素をピックアップし、共通する点を洗い出し、そこから平均的な姿を抽出することにより、長寿に至る法則を見いだそうとするものが多い。

中には、家訓や店則等の記載から、その精神性や信仰に着目し、長寿性の要因として仏教を指摘するものもある。しかし、何故、仏教に基づく長寿になるのか、基盤となった仏教とは何か、その教義にまで踏み込んで検討しているものは少ない。

本稿では、日本企業の長寿の要因として、仏教教義と信仰を取り上げ、仏教の観点から、長寿企業の特徴を明らかにするものである。しかしながら、仏教は広く深淵な教えである。浅学非器の身においては荷が勝つが、仏教についての誤解もあり、十分な理解がされていないことに鑑み、その一端を明らかにすることを試みた上で、論を進めていく。（本来であれば、経文については原文を掲載すべきであるが、この趣旨により現代語に訳して表示する）

まず、日本に長寿企業が多いことを確認した上で、その要因の一つとして仏教精神があることを指摘する。続いて、仏教とは何か、その歴史を含めて概観し、「因果の道理」、「四諦」、「三法印」を中心にその根本教義について言及し、それを踏まえて、実践として菩薩行を明かにした後、仏教と企業の長寿性との関係について論究するものである。

Ⅱ. 日本の長寿企業

1. 日本の長寿企業

不祥事を起こし、あるいは本業の不振により倒産に追い込まれる企業もある。大企業とて例外ではない。その一方、堅実な経営により、長く維持発展を続けている企業もある。

韓国銀行が2008年5月に発表した「日本企業の長寿要因および示唆点」¹⁾と題する報告書によると、世界で創業200年以上の企業は5,586社（合計41カ国）あり、このうち半分以上の3,146社が日本に集中しており、続いてドイツ837社、オランダ222社、フランス196社の順となっている。

帝国データバンクの「長寿企業の実態調査」²⁾によれば、2011年8月にまとめた調査では、企

業平均年齢は35.6歳となり、前年を0.5歳上回った。また、明治末年（1912年）までに創業した、100年の齢を数える「長寿企業」は全国で24,792社（143万社中）に及び、全体の1.7%を占めた。200年以上の企業は3,000社超、500年以上でも30社超、創業1,000年以上の企業も7社あった。2014年8月の調査によれば、創業100年長寿企業は全国で27,355社に増え、全体の1.89%を占めている。

毎年多くの企業が生まれ、多くの企業が消滅していく。では、長期存続に至る要因はどこにあるのか。

まず、長寿企業として知られる近江商人を取り上げ、その特徴から長寿性の要因を探っていく。

2. 長寿企業の特徴

（1）長寿企業の経営的特質

近江商人は、現在の滋賀県を拠点として行商や出店を中心に全国に活動した商人であり、その経営について次の点が特徴としてあげられる³⁾。

- ①行商形態
- ②全国各地への出店
- ③多岐に渡る営業の種類
- ④合理的な経営
- ⑤仏教精神

このうち、特に、注目すべきは精神性にあるといわれ、その精神性の形成にあたって、仏教が大きな役割を果たしたと考えられている。

この点について、芹沢博通は、その著書『日本の近代化と宗教倫理』のなかで、近世近江商人の経済的合理主義としての経済精神について、禁欲と勤勉、社会奉仕の精神、正直、堪忍、和合の精神、安定成長、自利利他の商い、堅実経営、算用と勘定、商品吟味、信心、御先祖様と世間様、家業第一主義、物資流通の職分観と利は余沢の経済観、遵法商法の15項目をあげて検討し、この経済精神の形成が宗教的経営倫理、とりわけ仏教の経営倫理に基礎づけられていることを指摘している⁴⁾。

（2）仏教からの影響

仏教からの影響について、近江商人の「家訓や店別」⁵⁾の中から代表的なものをあげてみる。山中光栄一は、『慎』に「仏事等大切に相勤可申事」と、中村治兵衛宗岸は『家訓』に、「信心慈悲を忘れず、心を常に快すべし」と、中井源左衛門良祐『金持商人一枚起請文』に、

もろもろの人々沙汰し申さるるハ、金溜る人を運のある、我は運のなき杯と申ハ、愚にして大なる誤なり。運と申事は候はず。金持にならんと思はば、酒宴遊興奢を禁じ、長寿を心掛、始末第一に、商売を励むより他に仔細は候はず。此外に食欲を思はば、先祖の憐みにはづれ、天理にもれ候べし。始末と吝きの違あり。無智の輩ハ思ふべきか。吝光りは消えうせぬ、始末の光明満ぬれば、十万億土を照すべし。かく心得て行いなせる身には、五万十万の金の出来るハ疑ひなし。但運と申事の候て、国の長者と呼ぶる事は、一代にては成がたし。二代三代もつづいて善人の生れ出る也。それを祈候には、隠徳善事をなさんより全別儀候はず。後の子孫の奢を防んため、愚老の所存を書記畢。

と、記している。

これらのことから、近江商人においては、商業活動ならびに日常生活に仏教精神が息づいていることが見て取れる。

この点について、江頭恒治教授は、次の様に述べている。

「近江商人の商法の真髓は、正直と堅実であり、勤勉と儉約であったが、このような精神が根本的には何に胚胎したかといえ、それは疑いもなく、神仏に対する信仰と儒教の教えであったと思う。家憲や店別には必ずといってよいくらい、神仏に対する帰依が説かれてあり、また儒教的倫理が述べられている。神と仏とは並置されていて、両者の間にいささかも対立・矛盾を感じたような気配はない。神・儒・仏が渾然一体となった日本的エトスこそが、近江商人の商人道の基盤であり、これが、ともすれば奔騰せんとする商魂にわくをはめたものと思う。」⁶⁾

以上の様に、近江商人において、その経営倫理を生みだす根底には、かれらの神仏に対する信仰、特に仏教に基づく宗教意識があったと解される。

これは近江商人に限ったことではない。江戸時代の大店と称される大商人の家には、家訓や家法が定められ、神仏への帰依、禁欲精神、慈悲心、陰徳善事、正直、儉約、勤勉などが謳われ、文字や口頭で連綿と伝えられ、仏教が企業経営の精神的支柱として位置づけられてきた。

さらに、1,000年クラスの企業（組織）を見てみると、すべてではないが、金剛組（578年）、池坊華道会（およそ1400年前）、法師（718年）、田中伊雅佛具店（889年）など、その多くの企業が創設ならびに事業において仏教と深く関わっていることがわかる。

金剛組は、四天王寺建立のために聖徳太子によって百濟より招かれた3人の宮大工のうちの金剛重光により創業された。池坊華道会については、京都六角堂の僧侶により華道が確立されたことに由来する。法師は、泰澄大師の開湯に際し、湯治宿として開業された。田中伊雅佛具店は、真言宗など各宗派の仏具の製造している。

住友、伊藤忠などの大企業を例にとると、創設者である住友政友（法号：文殊院）、伊藤忠兵衛は篤信の仏教徒であり、仏教の真髓を信受し、企業経営、ならびに生き様として仏教を支柱にしていたことが知られている。

例えば、伊藤忠と丸紅の始祖、初代、伊藤家忠兵衛の『遺訓』には、

事業や財産の興廢存滅はさらに意とするに足らぬ、理由のある事で仕事を潰しても決して文

句は伝はぬが、お前は信仰のある家に生まれた、しかも得難い他力安心の家庭に育つた丈に他のすべては失つても本當の念仏の味、難有さ丈は忘れて呉れるな、仕事も生活もすべてそれに乗せて呉れ⁷⁾。

と記されており、そこから、初代の忠兵衛が熱心な仏教徒であったこと、さらには、二代目に対し並々ならぬ覚悟をもって信仰の継承を強く願っていた姿が伺える。

その様な境地は、どの様に培われたのか。また、そこまでの影響を与える仏教とは何か。

Ⅲ. 仏教

1. 仏教とは

ここでは、まず、特定の宗派に偏ることなく、釈尊の教えとしての仏教を見ていく。

仏教を含め、世界には、多くの宗教があり、数多くの人々の信仰を集めている。

宗教の「宗」とは、「おおもと、根本の真理、おおもとの教え」⁸⁾をいい、宗教とは、「言語では表現されない究極の真理と、それを伝えるための教え」⁹⁾をいう。

中でも仏教は、ただ自分の苦しみや痛みを神にぶつけ、一時的な救いを求めるというのではなく、その苦痛の原因を外的なものだけではなく、深く自分の内に分け入り、究明して真理を把握したところに特長がある。

このことから、仏教は「哲学」であるといわれ、さらに、人間の深層心理に分け入り精神分析をした点からは「心理学」、極大の宇宙から極小の粗粒子の世界を「円相」と看破した点からは「物理学」、ゼロ（空）を明かにし、一・十・百…阿僧祇・那由他・不可思議・無量大数などの大きな数や、分・厘・毛…阿頼耶・阿摩羅・涅槃寂靜などの小さな数を命数法により精緻化した点では「数学」、人体の構造や「いのち」を説き明かした点では「医学」や「生物学」であり、機に応じ時に応じ、理路整然と御口から流れ出る珠玉の言霊は「文学」であり、仏教は全ての学問を包含している。

勿論、経済学や経営学も含まれ、宗教もその一部に過ぎない。

この様に、仏教は、「この世は全て、神によって造られ、支配されている」という一元的な教えに比べ、広くかつ深淵である。そのために、真剣に取り組もうとすると、難信難解であるが故に「仏教は難しい」とか「仏教は解らない」という言葉が聞かれる様になる。

その本質は、仏陀となった釈尊の悟りの内容を明らかにしたものであり、

- ① 仏と成った釈尊の教えであることから、歴史上の仏教であり (仏)、
- ② 釈尊が悟った真理の教法であることから、教理上の仏教であり (法)、
- ③ 釈尊と同一の悟りを得て仏と成るべき教えであることから、その修行方法としての仏教である (僧)、ということができる。

2. 仏教の歴史

釈尊の悟りの内容は、妙（たえ）なるものであり深淵なものであった。それ故、釈尊はそれを分かり易く、理解できるよう擬人法や比喻など様々な手段をもって、人それぞれに見合った教えを説いたため、膨大な数の教えとなった。それを編纂し、文字に表わしたものが『経典』である。

釈尊が入滅して100年ほど経ったころ、教団は戒律の解釈を巡って対立し、ついには、保守的な「上座部」とこれに反発する「大衆部」に分裂した。これが「根本分裂」である。その後、数百年を経て上座部が11部に、大衆部が9部分かれ自説を展開する様になった。

上座部仏教はインドより南に伝播し、スリランカ、タイ、ミャンマー、カンボジアなどの東南アジア諸国に根付いた。大衆部から大乘仏教が生まれ、シルクロードを通り、中国、朝鮮半島を経て日本へと伝わった。さらに、数世紀後、インドからヒマラヤ山脈を越えてチベットの地へ第三の潮流、チベット密教が派生していった。

日本への仏教の伝来は、『日本書紀』によると、飛鳥時代552年（欽明天皇13年）に百済の聖王（聖明王）により釈迦仏の金銅像と経論他が献上された時だとされている。その後、聖徳太子が仏教を国の柱に据えるとともに、日本各地に寺院を建立し広く仏教を弘めた。

一つであった仏教は、時を経て13宗53派（56派の説もある）に分かれていった。その歴史を概観してみると、飛鳥時代から奈良時代にかけて、多くの経論が中国や朝鮮半島から持ち込まれ教学を中心とした研究が行われた。一般に、南都6宗と呼ばれる俱舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華嚴宗が代表的なものである。平安時代初期には、最澄が天台宗を、空海が真言宗を立宗し、鎌倉時代には、良忍が融通念仏宗を、法然上人が浄土宗を、栄西が臨済宗を、親鸞が浄土真宗を、道元が曹洞宗を、日蓮が日蓮宗を、一遍上人が時宗を開いた。さらに、江戸時代には、隠元によって黄檗宗がもたらされた。

この様に、多くの上人が現れ、学問・修行・密教・禅・念仏・題目等、その開祖の特徴により、それぞれ縁のある『経典』を拠り所として宗門を開き、日本中に仏教を弘め、人々を導いた。これらの宗派を見ると、一見、相矛盾した教えの様に見えるものでも、「仏教の真髄」へと導く方法の違いであり、その根底に流れるものは同じ釈尊の教えであり、変わるものはない。

しかし、枝葉末節にとらわれて本筋を見失うことから、釈尊の教えから外れ、迷い、正しい理解には至らないのである。

IV. 仏教の根本教義

では、釈尊の説いた教えとは何か。『阿含経』などを中心に、その一端を見ていく。

1. 四 諦

（１）四 諦

釈尊は、その悟りの内容を相手の人々に理解しやすい様に、組織だてて４つの型で示して教えた。それが『般泥洹經』¹⁰⁾などに説かれる「四諦」である。具体的には、

- ①苦諦：現状把握（人生は苦である）
- ②集諦：原因分析（苦の原因は、自分に対する執着より生じる煩惱である）
- ③滅諦：目標設定（煩惱を滅した境地が涅槃、悟である）
- ④道諦：解決方法（涅槃、悟に至る方法がある）

という「四つの真理」をいう。

これを『雑阿含經』には、

「大医王は、

- ①よく病を知り、
- ②よく病の源を知り、
- ③よく病を知りて退治し、
- ④よく治病を知りて、さらに動発させることがない。

如来も、大医王となって、四徳（悟りの四つの境地）を成就して、衆生の病を癒す¹¹⁾と説かれている様に、医術に喩えてその教えを示している。

その一つ一つを見ていく。

（２）苦 諦

仏教への第一歩は、真に「人生は苦である」と自覚することである。

この自覚あってこそ、苦悩の原因を分析し、苦悩を滅した境地を覺り、苦悩を滅する方法を見出すことができるのである。

神という外の対象物に祈りを捧げるのではなく、「内なる自己を知る」、「自分を見つめる」ことから、仏教は「自覚の宗教」といわれるのである。

釈尊は、自己を見つめた末、生は苦である、老いることも苦である、病むことも苦である、死も苦であると、人の一生を称して「一切皆苦」とであると看破した。

生病老死の四苦¹²⁾だけは、どんな幸福な星の下に生まれた者であろうとも、どんな強運に恵まれた者であろうとも、如何なる聖人君子であろうとも、決して避けて通ることのできないものである。では、その苦しみは、一体、どの様に起きてくるのか。

(3) 集諦と滅諦

①因果の道理

釈尊は、すべては「因果の道理」、「因縁」によって起こると説いている。

「因果の道理」は釈尊が悟られた真理で、一切のものは原因があって生起し、原因なくしては何ものも生じないという理であり、しかも、自業自得といって、自分の受ける結果について自分自身にその原因を求めるのである。三世十方を貫く理であり、仏教の最高原理である。

さらに、この世の総ての現象は、因と縁（条件）との和合の結果として生じてくるものであって、因のみでも、また、縁のみでも結果は生じることはない。これが「縁起」であり、「因縁法」である。因と果を直接的に結び付けず、縁の概念を加えたところに仏教の特徴がある。

ところが、世の中を見てみると、努力している人が一生涯不遇に終わり、努力もしない人が栄達を受けるといふ様に、一見「因果の道理」が成立していないのではないかと思われる理不尽な現象や、また、不可思議・奇跡と思える出来事や、当事者にさえ原因が解らない事件が引き起こされることがある。

このような現象は、過去、現在、未来という三世¹³⁾あり、しかも果報を受ける時期が一定でないために起こることであり、厳然と「因果の道理」は成立しているのである。つまり、因と果の間には三世の中で時間的な隔たりがあり、すぐさま果として生じこともあれば、時間を経て生じることもあるため、一見、「因果の道理」が成立していないと思いついて誤っているだけのことである。

因と果の間には時間的な隔たりについて、『優婆塞戒經』に「四種業報」として次の4つに分けて説かれている¹⁴⁾。

- 1) 現在、直ぐに、その果報を受ける。
- 2) 次の生において、その果報を受ける。
- 3) 現在でも次生でもなく、その次あるいは、その次の次の世で果報を受ける。
- 4) 果報を受ける時期が、いつと定まらない。

過去、現在、未来の三世の中で見てみれば、起きた現象には必ず原因があり、この原理を離れて存在するものはないのである。

しかも、この業因を蒔くにも、

- 1) 己一人で蒔いたもの（不共業）、
- 2) 他人と共同して蒔いたもの（共業）

があり、現在、一個人として受ける果は不共業の果報であり、家族・社会・国家などの世界的に共通した果を受けるのは共業の果報である。（「業」とは「人間のなす行為」¹⁵⁾をいう）

この様に、釈尊は「因果の道理」を根本原理とし、人間存在を見つめ、過去、現在、未来の三世の長い時間の中で苦しみが如何にして生じるか、その原因と解決方法を追求したのである。

では、苦の原因は何か。

因果の道理にしたがえば、「自因自果」（自業自得）であり、かつ「善因楽果、悪因苦果」（善

を行えば楽を受け、悪を犯すから苦を受ける）である。

つまり、今、現在、私達がこうして存在し、苦しみや悲しみや、喜びや楽しみを受けるのも、それぞれに原因があり、それに条件が作用して互いに関連しあって存在しているからであり、外から来るものではなく、自分自身にある。すなわち、私達の苦しみは自己を中心として物事を捉え、自分を正当化しようとする様な「我が身」に対する執着（忘れずにいつも心に思うこと）¹⁶⁾から起こるものなのである。

②煩悩

自分に対する執着の顕れが煩悩である。

煩悩の「煩」は、「わずらわしい」、「悩」は「なやみ」のことで、「悪い心のはたらき。心身をわずらわし、悩ます精神作用」¹⁷⁾をいい、その代表的なものが貪欲、瞋恚、愚痴（むさぼり、いかり、おろかさ）である。

『仏説無量壽経』「三毒・五悪段」¹⁸⁾に、「貪欲」のために苦しむ姿について、

地位の高い低い（尊卑）、貧富などの違い、年齢や性別の如何にかかわりなく、皆、一様に金銭や財産のことで悩んでいる。その有る無しに拘らず思い煩うことには変わりがない。

うろたえたり、ふさぎ込んだりして様々な思い煩いを重ね、常に欲の心に振り回されて少しも安らかな時がないのである。

田があれば田について悩み、家があれば家について悩む。牛や馬などの家畜を始め、使用人（奴婢）、金銭や財産、衣服や食物、道具類についても、有れば有るで憂い悩む。

持っていること自体が心配の種となり、溜息をついて嘆き恐れるのである。

思いがけない水害や火災に遇い、盗賊や怨みを抱く者、金銭の貸し主などによって財産が奪われ、それらをすっかり失ってしまうと、忽ち激しい憂いが生じて取り乱し、心の安まる暇もない。怒りを心に抱き続けていつまでも悩み続ける。（中略）

一方、貧しい者や地位の低い者は物が無いために苦しみ悩み、常に心は不足ばかりである。

田が無ければ田が欲しいと悩み、家が無ければ家が欲しいと悩む。

牛や馬などの家畜、使用人、金銭や財産、衣服や食物、道具類についても、無ければ無いでそれらが欲しいと思ひ煩うものである。

偶々、一つのものが手に入ると、また他の一つが欲しくなり、これが得られると他が得られないということになり、あれもこれも全てを取り揃えたいと欲するのである。

これらのものがやっと揃ったと喜んだ時、それはほんの束の間のことでたちまちそれは無くなってしまうのである。

また、「瞋恚」のために苦しむ姿について、

もし心に怒りを生じて争いを起こしたなら、この世では些細な憎しみや嫉みであっても、後の世には次第に激しくなり、途方もなく大きな恨みとなるのである。

何故かといえば、この世のことは、人それぞれが互いに傷つけ合っている、たとえ、それがすぐには大事とはならないにしても、心の中には毒を含み、怒りを蓄えて、それはいつまでも心の中に刻みつけられ、離れることはない。後の世には、仇敵となって生まれ変わり、それが繰り返され、いつまで経ってもその報復の絶えることがないのである。

さらに、「愚痴」（因果の道理を信じない故に生じる迷の根本）のために苦しむ姿について、

世間の人々は善い行いをすれば善い報いが得られ、道を修すれば悟りが得られるということ信ぜず、また、人が死ねば次の世に生まれかわり、恵みを施せば福を得られるということ信じない。

このような善悪・因果の道理も全く信じないで、却ってそのようなことは無いと言って、最期までこれを認めることがない。このような見解に止まっているので、子孫も代々これを見習い、先祖と同じく因果の道理を信じないのである。

と、説かれている。

この様に、釈尊は、私達の苦の根本原因は、外にあるのではなく、私達の心の中にあり、それが、貪欲・瞋恚・愚痴であることを具体的に示したのである。これは釈尊の時代から2,500年を経た現代でも変わることはない。

では、この苦縛から逃れるためには、どの様にすれば良いのか。

まず、自分が苦しみの存在であること、さらに、その苦しみの根源が自分自身の心にあるということを実感しなければならない。ところが、私達は、その自覚が出来ない。そのために、執着を離れることができず、永劫として繰り返しているのである。

では、この煩惱が生じる原因は何か。それは、我（自分）を「永久不変な実体」として「執着」するからである。

③涅槃

あらゆる存在は、因果の道理にしたがって変化する（諸行無常）ものである。しかも、縁によって仮に現れているだけで、永久不変な実体はない。私達の存在も、因と縁が和合して仮に現れているだけであり、縁が尽きると消滅する。したがって、そこには「我」（自分）というものも、「我がもの」（自分のもの）というものもない（諸法無我）。

「諸法は無我」であるにもかかわらず、この真実¹⁹⁾とは逆に、永遠に変わらない何か、つまり、「我」というものや、「我がもの」というものがある様に思い、それに執着し、煩惱を生じるが故に苦しんでいるのである。

このような煩惱を滅した状態、すなわち、煩惱を止滅し、自我的偏見の無くなった安らぎの境地が「涅槃」であり、釈尊の悟の境地である。「涅槃」とは、「吹き消す」という意味で、「迷いの火を吹き消した状態」²⁰⁾をいい、それを「彼岸」とも、「成仏」ともいうのである。

これら「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂靜」は、「三法印」と呼ばれ、仏教の特徴である。

（４）道 諦

仏教の理想、「涅槃」へ到るための実践方法を説き示したのが『道諦』である。

まず学問から入り、次に行に入り、仏の智慧を得ることになる。この修行方法を戒・定・慧の三学²¹⁾という。この三学を具体的に様々な形に分類したのが、四念処、四正勤、四神足、五根、五力、七覚支、八正道、六波羅蜜多行などの修行方法である。

しかし、この様な修行方法だけで、釈尊と同じ悟りを得ようとするならば、三阿僧祇劫²²⁾にわたる計り知れない期間が必要であると説かれている。

しかも、現在は、修行さえできない時代である。

『大方等大集経』「分布閻浮提品」に、釈尊の入滅後の仏教の盛衰を、500年を1期として、解脱堅固・禅定堅固・多聞堅固・造寺堅固・闍諍堅固の五つの時期に分けて示している²³⁾。

- 1) 解脱堅固、自ら智慧を得て悟りを開く者が多い時代。
- 2) 禅定堅固、禅定を保つ者が多い時代。
- 3) 多聞堅固、経を読誦し、教えを聴く者が多い時代。
- 4) 造塔寺堅固、仏塔や寺院の建物が盛んな時代。
- 5) 闍諍堅固、互いの自説に固執して争う時代。

釈尊御入滅よりおよそ2,500年の時を経た現在、5) 闍諍堅固の時代にあたり、三時説²⁴⁾においては末法と呼ばれ、「末法の時代に、数多くの衆生が自力の修行にて仏になろうとしても、一人も成る者はない」²⁵⁾と説かれている様に、末法の現在、どんなに修行しても、自力では仏になることは出来ないのである。

そこで、釈尊は、既にこの末法の時代の到来を予見し、修行も出来ない下根劣機な末世の凡夫²⁶⁾のために、他力の救済手段を残したのである。

2. 仏教と科学

上述した様に、釈尊が悟った内容、すなわち、「普遍の真理」を解き明かしたのが仏教である。では、科学のそれとは何が違うのか。まずは、思考方法である。

（１）科学的思考方法と仏教的思考方法

科学は、西洋的思考方法を基本とし、事象の観察と理論化を通じて展開される。

西洋的思考方法においては、主客²⁷⁾二元論に基づき、現象世界にあるあらゆる事物を、自分と自分以外のものという自他の二つに分け、自分以外の客観世界から真理を見いだそうとする。ここでは、「自分、主観、観るもの、五感を通じて認識するもの」と、「自分以外のもの、客観、観られるもの、五感を通じて認識されるもの」に分けられることとなる。

主観と客観に分け、主観を排し客観性を追求することによって、価値や尺度の統一化がはかられ、情報の共有化が進み、同じテーマについて多くの人々が取り組める様になった。それにより、科学、およびそれと一体となった技術は、高度に専門化され、また新たな分野が切り開かれ、目覚ましい進歩を遂げ、モノも豊かになった。

しかし、人々の生活を豊かにすると期待された物質文明は、経済、社会、教育、環境などさまざまな方面で、今、その矛盾を露呈している。

その原因の一つは主客二元論に内在する「限界」にあると考えられる。

研究対象である客観と、研究する主観たる自分とを切り離し、しかも、個を重視し、比較することから自他の対立を生じ、さらに、自らを是とし、他を非とするため、排他的、独善的となった。その結果、人と人、民族と民族、国家と国家、宗教と宗教、人間と自然などの対立がもたらされた。殊に、人と自然、「唯一絶対なる神を信じるもの」と「唯一絶対なる神を信じるもの」の対立は深刻であり、未だに解決の糸口さえ見出すこともできない。

また、1つのものを自他（主客）の2つに切り離し、現世という時間の中で、五感（目耳鼻舌身の感覚）によって知り得る範囲内で真理を探究しようとしても自ずと限界があるものである。例えば、「いのち」や「心」の本源を探るため、人体を細かく解剖し、さらに素粒子のレベルまで分解し、また、宇宙誕生の謎を解くべく、様々なアプローチを試みているが、未だにその答えを見出していない。

どこかの段階で、「神の御意志」というブラックボックスに逃げ込まれてしまう。

この様な限界について、池内了は『科学の限界』²⁸⁾において、科学技術が無秩序に発展し、高度に専門化してしまったことによる弊害が現れているとして、①人間が生み出すものとしての限界、②社会が生み出すものとしての限界、③科学に内在する限界、④社会とのせめぎ合いにおける限界が指摘され、科学の無力さを露呈したとともに、技術がいかに脆弱なものであるかを見せつけ、科学・技術に依拠する現代の文明がいかに脆い基盤の上に花咲くか弱い存在でしかないかを認識させた、と指摘している。

それに対し、自他を対立させることなく、自分と他は不可分であり、客観と主観とは一つ、すなわち、「自他一如」（自他共に一如に溶け合う）の考え方が仏教の思考方法である。

その結果、到達できるのが、「一即全・全即一」の境地であり、『般若経』などに示される「色即是空・空即是色」の世界である。

この点について『般若波羅蜜多心經』²⁹⁾には次の様に説かれている。色（しき）とは物質と現象をいい、その色は空（くう）からつくり出されたものであり、人間が有する受（感情）、想（観念）、行（言動行為）、識（意識）など、万物万象をつくりだすのは空であり、それを照見（本質や実相を正しく見極める）すれば、一切の苦縛から脱することができるのである³⁰⁾。

さらに、心の働き（識）も、受、想、行の総合であり、六根・六境・六識（肉体と環境の相互関係）で現れ、光、音、香、味、感覚、意識と言っているものも、エネルギーが目・耳・鼻・舌・身という五感を通じて入るのを、光、音、香、味、感覚と受け取り、認識しているにすぎず、しかも、

このような心の働きも一切、空がつくり出しているのである³¹⁾。

すなわち、「色と空は不二」であり、「一切は、皆、空」なのである。

（２）自他一如

以上の様に、「一切は、皆、空」であり、私達の身体も、空よりつくり出された自然界の物質が因と縁の和合により仮に現れているだけである。何十年かの間、一つの形体を維持し、縁が尽きると消滅する。しかも、縁によって仮に現れているだけで、永久不変な実体はなく、その形体の中を変化しながら、次から次へと通り抜けているにすぎない。したがって、そこには「我」（自分）というものも、「我がもの」（自分のもの）というものもない。すなわち、無我である。

しかし、私達は、この様な変化を考えることなく、いつも変わることはない「固定した実体」があると錯覚し、それを自分だと思い込んでいる。

しかも、自分の身体だけでなく、大自然のあらゆる物についても同じ様である。

つまり、現象世界に現われる物すべては、縁によって起こるのであり、差別の相は、すべて種々の縁の違いによって起こったものである。極大の大宇宙から、極少の素粒子の世界まで、この世に存在する全ての物は同じ物質によって構成されており、同じ物質である「因」に対して作用する「縁」の違いによって、あらゆる多種多様な物に変化して現われているにすぎない。

その死によって身体を構成していた物質が離れ、他の動物や植物の一部となることもある。

以上の様に、この現象世界に存在するものは全て、因と縁との和合が織り成す壮大な綾織物であり、一つとして不要なものはなく、一つ一つが関連し合い、重要な役目を担い、「和」を保って整然としているのである。

日本文化は、この理を「情けは人の為ならず、巡り巡って己がため」、「お陰様」等の言葉に託して伝えてきた。

この理に反し、「和」を破るものがある。この理を知らない人間である。

例えば、「持ちつ持たれつ」や「全ては循環の中にある」という世界観ではなく、この世はアダムとイヴのエデンの園から始まり、その時から終末が決められているという直線的な世界観や、「今がよければ」という人生観に立てば、次の事態を考える必要がないことから、「不要なものは、埋めるか、燃やせばよい」という使い捨ての思考に陥り易い。

「諸法は無我」であり、「自他一如」であるにも拘わらず、生かされていることも識らず、人間は他の動植物より勝れており、大自然をコントロールできると思い誤り、結果として大自然を汚染し、あるいは破壊している。それが私達自身を汚し傷つけているのであるが、その自覚ができない。非常に残念なことである。

(3) 智慧の宗教・実践の宗教

釈尊は、万物万象をつくりだす根本は空であることを明らかにし、それを前提として、万物万象の生起消滅を「諸行無常」と、万物万象が相互関係を持ち、単独での存在はありえないということを「諸法無我」と、万物万象の安定した状態を「涅槃寂靜」と、説き明かしたのである。

この様に、仏教は、永劫に亘る時間も、大宇宙の空間をも超え、万物万象の根源をも明らかにしており、廣大無辺で奥深いものであり、それ故に「智慧の宗教」ともいわれる。

独学で経論を読誦し解説書を読んでも理解もできず、腑に落とすこともできない境地であることから、私達には難しく感じるのである。

したがって、この理を信解し、その境地に至るためには、「仏教の真髓」を説き示すことのできる「師」に出遇うことが肝要である。

歴史上の名僧も命がけで「師」を求めたことが知られている。

例えば、中国の玄奘三蔵は求法の旅の末にインドのナーランダ僧院（大学）において戒賢（シーラパドラ、正法蔵）に巡り合い、禅宗の二祖慧大師可は雪中断臂して達磨大師に相見え、日本では、弘法大師空海は日本海を渡り恵果阿闍梨に出遇い、「智慧第一」と称された法然上人でさえ「真の師」を求め、時空を超えて善導大師に邂逅し、親鸞聖人は比叡山を下り六角堂へ百日間参籠の後、法然上人に値遇した様に、仏教においては「真の師」が不可欠なものである。

しかも、仏教は知識として知っただけでは何もならない。その心が問題である。釈尊の教えを真摯に学ぶことはもちろん、正しい仏道実践を通して身につけていかなければ、単なる学問に終わってしまうだけである。それ故に、「実践の宗教」ともいわれるのである。

V. 仏教と経営

1. 菩薩行

(1) おもてなしとサービス

仏教は、釈尊によって説き示された不滅の真理であり、「仏教の真髓」を信受し実践することによって、釈尊の示した「自他一如」の境地を感得できるのである。その境地を、自他円満とも、慈悲心とも、仏心ともいう。（『経典』等により術語が異なるが、同一の意味で使用する）

その実践が菩薩行である。真の仏教徒が実践すべき行いであり、過去、仏教の真髓を信受した人々が実践してきた徳目である。

菩薩とは、bodhisattva の音写で、bodhi は「菩提」と漢訳され、sattva とは「生きている者」の意味で「衆生」あるいは「有情」(仏陀〔悟ったもの〕)に対する「煩惱をもったもの」を意味すると漢訳され、合わせて「さとり成就を欲するひと。さとりを求めて修行する者」³²⁾をいう。具体的には、「上求菩薩下化衆生」(自らも悟りを求め、仏に成る道を進み、人々の救済を願い教化し濟度する)を実践する人をいい、特に大乘仏教では、最高の悟りを求める心(菩提心)を起して「自他円満」を実践する人はすべて菩薩と考えられる。

しかし、行といっても、その境地の感得に主眼があり、寺院だけでなく、日々の生活が修行・実践の場ということになる。

菩薩の行(業)について、初代忠兵衛の座右の銘に、
「商売は菩薩の業、商売の道の尊さは、売り買い何れも益して世の不足をうずめ、御仏の心になうもの」³³⁾(商売は菩薩としての行いである。商売の道の尊いことは、仏様に成り代わって売り買いし、世間(世の中)の不足を補い、仏様の御心(慈悲の心)になうからである)とあることから、商売そのものを「自他円満」の場として捉えていたことがわかる。

さらに、近江商人の経営理念としてあげられる「三方よし」(売り手よし、買い手よし、世間よし)についても、単に三者の利に適うというような浮薄なものではなく、その根幹に「自他円満」の思想があることも理解できよう。

菩薩行の本質を明かにするため、「おもてなし」と「サービス」の違いを明確にし、その上で、ボランティア活動と対比する。

①おもてなしとサービス

「おもてなし」と「サービス」は同じ様に使うことがあるが、その精神性は大きく異なる。

サービス(service)は、『ジーニアス英語大辞典』によれば、「奉仕する、仕える」という意味であり、語源は「奴隸」という意味のラテン語 *servitium* である。

したがって、その語源である「奴隸」から解る通り、サービスを受ける側(お客様、主)と、サービスを提供する側(スタッフ、従)においては、主従・上下の関係が存在し、奉仕への対価として、その満足度に応じて上から下へチップが支払われることになる。

「おもてなし」については、茶道を例にとって見ていく。

茶道には、「客は亭主の心になり亭主は客の心になる、これが茶の湯の第一条なり」という言葉がある様に、「招く主」が「招かれた客」へ一方的に行うものではない。主催する亭主は入念な準備のもとに客を招き、精一杯のおもてなしをする。招かれた客は亭主の心を汲み取り、感謝の念を示すとともに、その場にふさわしい立ち振る舞いをなし、両者が共に協力し一体となり、その場を創り上げるのである。それが「主客一体」であり、それは仏教の「主客一如」の思想に基づいたものである。

さらには、『山上宗二記』³⁴⁾に利休の言葉として、「路地へ入ルヨリ出ヅルマデ、一期二一度ノ会ノヤウニ、亭主ヲ敬ヒ畏(かしこまる)ベシ」と記されている様に「一期一会」の心得が根底

にある。一期とは仏教用語で、人の一生の意味である。したがって、「一期一会」とは、「一生に一度限りの縁であり、二度と巡ってこない」と覚悟して、その時を大事に主客共に心を触れあうことをいうのである。

よって、「主客分離・上下関係」を前提とした欧米的な「サービス」とは異なり、「おもてなし」という短い術語の中には、仏教の根本である「主客一如」、「無常観」、「生死観」が含有され、その心づかいや振る舞いは菩薩行に通じるものと解される。

②菩薩行とボランティア

ボランティアは、救済・手助けを求めている人々への無給の勤労奉仕等をいい、エゴではなく、他者を思い、敵対する者であっても尽くそうとする行為である。そこには、同じ人間に対する深い慈しみがある。この様な利他性や慈悲心は、世界中の宗教や文化に観られ、何ものにもかえがたい尊いものである。例えば、キリスト教においても、ボランティア精神が根付いている。

ボランティア (volunteer) という術語は、志願者、有志者のほかに、志願兵 (反語は draft: 徴集兵) を意味し、それが元々の意味であったと考えられている。

さらに、ボランティア活動を実行する際の原則として、自発性、無償性、利他性の3つがあり、近年では、4つめの先駆性に加えられ様になった。自発的なものであり、無償であり、人間愛や利他性に基づくという点では仏教のそれとほぼ同じである。もともと宗教は、心の安寧の謳ったものであり、苦からの解放を目指し、その原因となるエゴを捨てることを教えている。それを体現したものがボランティア活動であり、仏教の菩薩行である。

しかしながら、仏教の説く「菩薩行」は、自分と他人を対立的に観るのではなく、「自他一如」の仏教的思考法に基づくものであり、「おもてなし」そのものである点、さらに、ボランティア活動の主要目的が他者の援助・救済にあり、菩薩行の目的が「自他一如」の感得にある点において、大きく異なるものである。

(2) 菩薩行

では、菩薩行とは何か。その具体的な項目として、六波羅蜜行があげられる。

『摩訶般若波羅蜜經』³⁵⁾には、

- 1) 「檀那波羅蜜」 布施 (与えること)
- 2) 「尸羅波羅蜜」 持戒 (戒律を守ること)
- 3) 「羼提波羅蜜」 忍辱 (苦難に耐え忍び、怒りの心を生じさせないこと)
- 4) 「毘梨耶波羅蜜」 精進 (真実の道を弛まず実践すること)
- 5) 「禪那波羅蜜」 禪定 (心の散乱を鎮めること)
- 6) 「般若波羅蜜」 智慧 (真実の智慧を求めること)

の6つの行が示されている。

これら6つの修行については相互に密接な関係があり、1つの修行が他の修行に重要な影響を与えるものであり、決して1つ1つの修行が単独で行なわれ修行が成就されるものではない。

紙面の都合で6つ全てを明らかにすることはできない。そこで第一番目に示されている布施(壇那波羅蜜)を取り上げ、「六波羅蜜行」の基本を見ていく。

釈尊は、「人は布施することによって、貪欲の心が取り除かれ、慈悲の心が養われる」と、布施を実践することにより、苦しみ根本である「貪欲」の心が取り除かれるとも説かれている。

布施とは、単なる「与える」という行為のみに意義があるのではなく、自分に対する執着を少しでもなくすことに意義がある。

具体的には、布施というと直ぐに金銭を連想するが、それだけではない。

布施には、財施(形ある物)、法施(仏の真理)、無畏施(心の安らぎ)を施すことも含まれている。さらに財物も智慧がなくても、眼施(やさしい眼差し)、和眼施(笑顔)、言辞施(やさしい言葉)、身施(身体的奉仕)、心施(温かい心づかい)、床座施(席を譲る)、房舎施(家や部屋を与える)という無財の七施があるとされている。

大切なのは、形でなく、その心、境地が肝要である。

『心地観経』には、布施について、

「物を与え奉仕する『施し手』と、奉仕を受ける『頂き手』と、奉仕の手段となる『施し物』の三者は『空』で清らかなもの、すなわち、三輪清浄でなければならない³⁶⁾とある。

施し手・頂き手・施し物について、一片の私心・私欲も混じることのない清らかなものでなければならない。無我の精神である三輪清浄と、無漏の行業(我執を離れたい)清浄な行が布施の本質である。この点について、

伴蒿蹊³⁷⁾は、『主人心得之草』に、

陰徳といふは目にみえぬかけの間にて人の為になるやうの事也。物一つほとこすにもさだまりて礼いふやうの事はすべき筈のことなり。おもてにはみえねども自然に其人のためになるやうにすれば、さきの人も其時はしらず、後におもひしるべし。陰徳あれば陽報ありとて、かくのごとく常につとむれば、めにみえたる幸をえて繁昌すべし。たゞし此幸を得るためとあてをしてするは陰徳にあらず。無心にすれば自然にめぐる也。

と記し、形ではなく心にあることを強調している。

すべてのものは「無我」であり、持ちつ持たれつに関係にあり、自己を主張することはない。それが宇宙一切を貫く「理」であることから、私心・私欲を挟むことなく無心に六波羅蜜行を実践し、煩惱を抑え、「自他一如」の境地を感得し養っていくのである。また、それは、「因果の道理」からいえば、仏(覚者)になるための縁とも見ることができる。

以上、菩薩行は、「自他一如」を感得し養うための行という側面、また、「仏教の真髓」を信受した後に顕れる「自他一如」の発露した行という側面、また、その心を確認し護持するための行という側面をも有すると理解できよう。

2. 仏教の職業観

「自他円満」という大乘仏教の根本精神から見ると、職業意識も次の様になる。

中村環『幻々要集』³⁸⁾「商工業秘訣」には、次の様に述べられている。

「商業とは生産された財を需要者に供給しそれによって報酬を受ける業のことをいい、工業とは財を生産して需要者に供給し、それによって報酬を受ける業のことをいう。社会はこれらの報酬のことを利益と呼ぶ。よってその利益を受ける理由は、他を利するからである。故に商業といい、工業という。両者とも他を利するという心行であり、他を利する心行によって、自らも利する功德を受ける。これを自利利他円満の功德という。もし、利他の心行が多く大きければ、自利の功德も多く大きくなり、利他の心行が少なく小さければ、自利の功德も少なく小さくなり、利他の心行が無ければ、自利の功德も無くなる。それ故に、商工業によって多く大きい功德を手に入れようと望むならば、すべからく多く大きい利他心を養うべきである。利他心は、すなわち菩提心である。菩提心を持ってすべての衆生（人々）を救うこと、これを菩薩行という。故に、菩薩行は、すなわち商工業である。商工業は、すなわち菩薩行である。」

さらに、鈴木正三は、『万民徳用』³⁹⁾等において、「実社会における職業倫理の実践のうちに仏教の本質がある」との考えに基づき、「諸職人なくしては、世界の用所、調ふべからず、武士なくして、世治まるべからず、農人なくして、世界の食物あるべからず、商人なくして、世界の自由、成るべからず、唯是一仏の徳用なり」と述べ、すべての職業は、不当な利益をむさぼらず、社会的有用性をもつ限りにおいて、「自他円満」となることから、菩薩の道に通じると解している。

このことから明かな様に、仏教のそれは、労働をアダムとイヴの犯した罪への贖いとして位置づけたのとは根本的に異なるものである。

3. 仏教と道徳

利他の心、つまり相手へ思いやることの大切さは、仏教を学ばなくても、道徳として家庭や学校等で教えられ、その重要性も理解されている。経営の問題として扱われることもある。

例えば、近代組織の創始者であるバーナードも、『経営者の役割』の中で「組織の存続は、それを支配している道徳性の高さに比例する。すなわち、予見、長期目的、高速な理想こそが協働を存続する基礎なのである。かように、組織の存続はリーダーシップの良否に依存し、その良否はその基礎にある道徳性の高さから生じるのである」⁴⁰⁾と述べている。

それにも関わらず、最近の日本の社会を見てみると、企業の社会的責任、そこに働く人々の倫理観やモラルが問われている。企業の不祥事を見てみると、モラルの低下がその原因としてあげられることも少なくない。最高学府を出て道徳を熟知しているはずの人でさえ、人の道を外れ問題を起こしていることもある。それは、何故か。

釈尊は『優婆塞戒經』⁴¹⁾「受戒品」において、

在家の求道者が仏教信徒としての道徳を受けたもたんとするに當っては、先づ社会通有の道徳を尊重することが肝要である。すなわち是を重んずる者にして始めて仏教独自の道徳に堪ゆる資格ありと謂うべきであると、

また、「五戒品」に、

道徳に二種ある、その一つは、一般世間の道徳律であって、その二つは仏教の道徳律である。宗教の背景なき道徳は、あたかも彩色に膠を用ひざるがよなものであって、確乎たる基礎がない、故に先ず、仏教に帰依して、その正しい信念から道徳を維持してゆかねばならぬと、さらに、「悲品」に、

凡そすべての道徳的活動なるものは、悉く慈悲心を根源として発生し来るのであって、彼の六種の徳行たる、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧等は皆慈悲の徳より生ひ出でたるものである。されば、この慈悲心を修養せずしては、仏教徒の道徳は現れないのである。又此の慈悲心を修養し来れば、その心力によって施し難きものも能く施す様になり、忍び難きも忍び、作し難きも作し得るやうになり、あらゆる徳行を励むやうになるのである。

故に一切の道徳は慈悲を根本とするのである。すなわち、仏教の道徳的活動はすべて慈悲心を原動力として発現するのである、と示している。

ここから明らかなことは、一切の道徳は、本来、慈悲心に基づくものである。しかも、日本画等に用いられる岩絵の具が膠（にかわ）と混ぜ合わせて使われなければ、紙に定着しないのと同様に、膠となる宗教と共に学ばなければ、心に定着することはないのである。頭で理解できたとしても、腑に落ち信解できないと、心底に止まらず自分のものにならないものと解される。

今の徳教育に不足しているものがあるとすれば、この点であろう。

4. 仏教と長寿性

今まで述べてきた様に、近江商人等は、仏教に帰依し「自他円満」の実践として、商売も日常生活も営んできた。さらに、家訓や店則を通して仏教へ篤い思いと仏教を基盤とした道徳律を、代々伝承し守り続けてきた。

仏教の最高原理は「因果の道理」である。しかも、「自因自果」、「善因楽果、悪因苦果」であり、我執にとらわれた行いは「悪」であることから「苦果」を招く。「自他一如」の顕現である菩薩行は、「善」であることから「楽果」をもたらすことになる。

しかも、自分だけでなく、家人から店全体へと教えが弘がり、実践すれば共業となり、企業自体の繁栄がもたらされる。さらに、この様な経営を子から孫へと継承していくことにより、代々繁栄し、結果として長寿となったのは、仏教の観点からすれば、当然の帰結である。

もともと、「経営」という言葉は、仏教用語で「規模を定めて、物事を営むこと。目標を定め、

力を尽くして励むこと」⁴²⁾の意味を有し、『阿含經』をはじめ、多くの經典に見られる。

さらにその由来を辿ってみると、經營の『經』とは、「①たていと。②たて。③みち。④つね。⑤のり。⑥ことわり。⑦義。⑧おさめる。⑨いとなむ。⑩すくう。⑪したがふ。⑫はかる」⁴³⁾などの多くの意味を有する。①「たていと」の意味で見ると、織物を織る際、經糸（たていと）が並べて張られ、そこ緯糸（よこいと）を通していくことになる。そのため、經糸がしっかりと張られていなければ、良い布を織ることはできない。

ビジネスでも同じことである。不易（変えてはならないもの）たる經糸をしっかりと張り、そこに流行（変えるべきもの）である緯糸を通していくのである。

また、經には、「③みち、⑤のり、⑥ことわり」の意味があることから、經典、すなわち、釈尊の教えとも解することができる。その様に考えると、經營とは、「釈尊の教え」に基づく「営み」と解され、菩薩としての生き様そのものであるといえるのである。

以上、長寿企業は、經糸として「普遍の真理である釈尊の教え」をしっかりと張り、そこに緯糸の「時代に応じた変革」を通し、長い期間を掛けて1反の色鮮やかな織物を、雄々しく賢く織り続けているものと理解できる。

VI. 結びにかえて

本来の仏教は、死者を弔うための葬式仏教でも、まして自分の欲望を神仏にぶつけて現世の利益を願うものでなく、勿論、企業の長寿を狙って信仰するのでもない。この世の理を明らかにし、人間存在を根本から見つめ、人として歩むべき道を示したものである。それ故に、多くの長寿企業においては精神的支柱となった。

その根本は「因果の道理」にあり、善悪と苦樂の関係でいえば、「善因樂果、悪因苦果」である。

それを、『増一阿含經』、『大般涅槃經』、『四分律』等に、「諸惡莫作衆善奉行。自淨其意是諸佛教」⁴⁴⁾（善いことを行い、悪いことはしてはならない。自らその心を淨くせよ。これが仏教である）」と説くのである。

菩薩行は、「自他円満」の実践であることから「善」である。それ故、結果として、樂果がもたらされ、企業が繁榮することは必然である。さらには、信仰を代々継承すれば、樂果が続くこととなり、企業や家が榮え続けたと考えられるのである。

この理を「積善の家には必ず余慶あり」、「陰徳を積めば陽報あり」という諺が伝えている。

しかしながら、事業經營やその継承には様々な困難をとまなう。經營や継承に失敗し、終止符を打つ企業も少なくない。まして、「真の師」との出遇いは「縁」であり、信仰の継承はさらなる困難を伴うものである。

伊藤家忠兵衛の『遺訓』、

「理由のある事で仕事を潰しても決して文句は伝はぬ、他のすべては失つても本當の念仏の味、

難有さ丈は忘れて呉れるな、仕事も生活もすべてそれに乗せて呉れ」
の真意も理解できよう。

しかも、今は「末法」。

世間の人々は善を行えば善い報いを得、道を修めれば悟りを得られるという道理を信じない。人が死ねば、次の世に生まれ変わることや、人に恵みを施せば、福德を得られることも信ぜず、善悪・因果の道理も信じないで、このようなことはないと思ひ、最期まで認めようとしなない。

(中略)

全ては儚く過ぎ去り、いつまでも生きていくことは出来ない。

この道理をどれ程説き聞かせても、信じるものは少ないのである。

そのため何時まで経っても生まれ変わりして流転が止むときがない。

このような人は、心が愚かで頑固であるため仏の教えを信じない。

将来のことを考えず、各自がただ目先の快樂を追っているだけである。

愛欲に迷い、道を修めて功德を積むこともせず、怒りに狂い、財欲と色欲を貪る姿は、まるで狼の様である。

このために悟りを得ることが出来ず、再び三悪道(地獄・餓鬼・畜生)の苦しみの世界に沈み、いつまでも生死を繰り返すのである。

その痛ましさは言葉に言い表すことは出来ず、実に哀れむべきことである。

と、釈尊が『無量壽經』「三毒段」⁴⁵⁾にて吐露した嘆きが聞こえてきそうである。

〔註〕

- 1) 韓国銀行「日本企業の長寿要因および示唆点」2008年5月
- 2) 帝国データバンク産業調査部「特別企画：企業平均年齢と長寿企業の実態調査」2013年、9月1日
- 3) 江頭恒治『近江商人中井家の研究』(復刻版)雄山閣、平成4年10月、23頁～24頁
- 4) 芹沢博通『日本の近代化と宗教倫理—近世近江商人論—』多賀出版、1997年、265頁
- 5) 『同上書』264頁
- 6) 江頭恒治『前掲書』26頁
- 7) 伊藤忠兵衛(1842～1903)は伊藤忠と丸紅の始祖である。二代目忠兵衛が著した『在りし日の父』には、父の遺訓として記されている。(伊藤忠兵衛「在りし日の父」古川鐵次郎編『在りし日と父』、1937年、55頁)
- 8) 中村元『仏教語大辞典』東京書籍、645頁
- 9) 『同上書』、645頁
- 10) 『般泥洹經』(『大正新脩大藏經』〔以下『大正』〕第1卷)、178頁
- 11) 求那跋陀羅譯『雜阿含經』(『大正』)第2卷、105頁に、「名曰大醫王者。所應王之具王之分。何等爲四。一者善知病。二者善知病源。三者善知病對治。四者善知治病已當來更不動發」
- 12) 生老病死に、愛別離苦・怨憎會苦・求不得苦・五蘊盛苦の四つを加え四苦八苦ともいう。
- 13) 私達は、賢愚・美醜・強弱・貧富等の「差別の因縁」をもって生まれて来ている。「因果の道理」を前提とするならば、その原因は生まれる前につくられたことになり、過去世の存在を考えざるをえない。過去世を認めるのであれば、必然的に、来世の存在を認めることとなる。
- 14) 曇無讖譯『優婆塞戒經』(『大正』第24卷)、1070頁
- 15) 中村元『前掲書』、406頁
- 16) 『同上書』、649頁

- 17) 『同上書』, 1273 頁
- 18) 康僧鑑譯『佛說無量壽經』(『大正』第 12 卷), 274 頁～ 275 頁。(一部を抜粋し現代語訳したものである)
- 19) この理を聖徳太子は、「世間虚仮 唯仏是真」(この世は皆、虚仮不実で、嘘の世界であり、唯、仏の世界だけが真実である)と示している。
- 20) 中村元『前掲書』, 1076 頁
- 21) 三学の「学」は学びではなく、仏道実践の意味で、戒律、禪定、智慧をいう。
- 22) 「劫」は時間の長さをいい、諸説ある。例えば、四十里四方(約百六十立方キロメートル)の入れ物に、芥子粒がいっぱい詰まっていて、百年に一回、一粒ずつ取っていく。その芥子粒が全部取り尽くされるまでの時間をいう。「阿僧祇」とは、数え切れないという意味で、十の五十九乗と考えられる。故に、阿僧祇劫は、ほとんど無限に近い時間ということになる。
- 23) 曇無讖譯『大方等大集經』(『大正』第 13 卷), 363 頁。「於我滅後五百年中。諸比丘等。猶於我法解脫堅固。我之正法禪定三昧得住堅固。次五百年誦誦多聞得住堅固。次五百年於我法中多造塔寺得住堅固。次五百年於我法中鬪諍言頌白法隱沒損減堅固」
- 24) 釈尊在世および滅後 500 年(または千年)を正法、次の千年を像法、その後一万年を末法の 3 つの時に分け、末法においては教法が正しく行われなくなるとされる。
- 25) 曇無讖譯『大方等大集經』(『大正』第 13 卷), 267 頁に「何者名爲末法世時。謂讀誦人無 不依於波羅提木叉道中行。若不坐禪則不能得於三摩提。乃至不得第四之果。乃至不得寂滅三昧」道綽は『安樂集』の中で、上記を意図を「我が末法の時の中の億億の衆生、行を起し道を修せんに、未だ一人も得る者有らず」と示している。
- 26) カンカリ語のアリカ・ジヤを翻訳したもので「異生」とも漢訳される。異生とは種々の異なった世界に生まれ変わるものということで、煩惱によって業をおこし、そのために種々の異なった世界(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天人)に生まれかわるものという意味である。
- 27) 「主観・客観」と「主体・客体」について、同義とする見解も、異議との見解もある。本稿では、前者を「観る・観られる」、後者を「動く・動かされる」と解す。
- 28) 池内了『科学の限界』ちくま新書, 2012 年
- 29) 玄奘譯『般若波羅蜜多心經』(『大正』第 8 卷), 848 頁
- 30) 『同上』, 848 頁に「照見五蘊皆空, 度一切苦厄。舍利子。色不異空, 空不異色, 色即是空, 空即是色。受・想・行・識亦復如是」
- 31) 『同上』 848 頁に「是故空中, 無色, 無受・想・行・識, 無眼・耳・鼻・舌・身・意, 無色・声・香・味・触・法」
- 32) 中村元『前掲書』, 1219 頁
- 33) サンライズ出版編集部『近江商人に学ぶ』サンライズ出版, 2003 年, 29 頁
- 34) 茶道利休の弟子、山上宗二が茶道の極意を著したもの。『山上宗二記一付・茶話指月集』(岩波文庫)文庫, 2006 年
- 35) 鳩摩羅什譯『摩訶般若波羅蜜經』(『大正』卷 8), 219 頁～ 302 頁
- 36) 般若譯『大乘本生心地觀經』(『大正』第 3 卷)
- 37) 伴蒿蹊(ばんこうけい, 1733 年～ 1806 年), 36 歳の時に家督を譲り剃髪し文筆家として著述に専念した。著作の代表として、近江商人の典型的な家訓を示した『主従心得草』がある。
- 38) 中村環著『幻々要集』福田社刊行部, 1927 年
- 39) 鈴木正三『万民徳用』, 1889 年
- 40) Chester Irving Barnard, The Functions of the Executive, Harvard University Press, 1968. 山本安二郎・回杉競・飯野春樹訳『経営者の役割』ダイヤモンド社, 1972 年, 295 頁を参照。
- 41) 曇無讖譯『優婆塞戒經』(『大正』24 卷), 1034 頁～ 1075 頁,(里見達雄訳著『現代意譯仏教道徳經集』仏教經典叢書, 1922 年, 115 頁～ 142 頁参照)
- 42) 中村元『前掲書』, 312 頁
- 43) 諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店, 第 8 卷, 1071 頁。(参照, 白川静『字通』平凡社, 398 頁)

- 44) 瞿曇僧伽提婆譯『増一阿含經』（『大正』第2巻），551頁
- 45) 康僧鎧譯『佛說無量壽經』（『大正』第12巻），274頁～275頁

〔参考文献〕

- ・小倉榮一郎『近江商人の経営管理』中央経済社，1991年
- ・小倉榮一郎『近江商人の理念』サンライズ出版，2003年
- ・帝国データバンク『百年続く企業の条件』朝日新書，2011年
- ・中村元・三枝充恵『バウッタ〔仏教〕』（小学館ライブラリー），1996年
- ・中村元『龍樹』（講談社学術文庫），2002年
- ・長谷日出雄『仏教と資本主義』新潮新書，2004年
- ・平川彰『インド・中国・日本 仏教通史』春秋社，1977年
- ・増谷文雄『仏教講義—根本仏教と大乘仏教の会通を語る』佼成出版社，2005年
- ・増谷文雄・梅原猛『智恵と慈悲〈ブツダ〉』（角川ソフィア文庫），1995年
- ・水野弘元『仏教要語の基礎知識』春秋社，1971年
- ・水野弘元『仏教の基礎知識』春秋社，1971年
- ・安部大佳「仏教の経営観に関する覚書」『龍谷大学経営学論集』第49巻第4号，2010年
- ・植松忠博「仏教と経済活動」『国際協力論集』第3巻第1号，1995年
- ・拙稿「近江商人の経営理念と経営システム」『地域経済』第23集，2004年
- ・拙稿「近江商人の合理性と経営倫理」『地域経済』第24集，2005年